



令嬢姉妹と 誘惑個人授業

伊吹泰郎

挿絵／大柴宗平

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

プロローグ	4
第一章 前払いは先輩の身体で	12
第二章 合宿の始まり	59
第三章 弱点克服の強化メニュー	115
第四章 珠実の特別講習	172
第五章 それからの合宿	230
エピローグ	284

登場人物

Characters

倉本進

(くらもとすすむ)

人がよく、純情な性格の青年。現在大学二年生。大学のゼミで珠実と知り合う。

喜多嶋珠実

(きたじま たまみ)

日本有数の家電メーカー創業者一族の令嬢。明るく快活、思いついたことは実行する性格で主人公を振り回すこともしばしば。

喜多嶋茉莉香

(きたじま まりか)

珠実の妹で、姉と反対に内向的で大人しい性格。女子校育ちのお嬢様タイプで男性に免疫がない。



グチュッ……ニチュッ！　ヂュプブウッ！

膣奥へ杭さながらに刺さったペニスで、膣壁を荒っぽくかき分けてみれば、身震いたくなる疼きが、全方位から押し寄せてきた。亀頭粘膜も竿の皮膚も伸びきったままだから、一分の隙もなく無数の襞と擦れ合う。

「ひはぁあっ!!　す、進さぁううっ!!」

自分から動くつもりでいた茉莉香は、この快楽を予期できなかつたらしく、雷を受けたように、身を硬くした。しかし、声は悩ましげになるし、蜜壺もさらなる発情の兆しのように脈打っている。

「しばらくはさっ……こういう動きでいいと思うんだけど……どうだろっ!!」

進が腰遣いを続行し、乳房も捏ねくりながら問いかければ、茉莉香は口で言うより先に自分から動き出した。返事が吐き出されたのはその後だ。

「はいっ……はひいっ！　この感じ……好きですうう！　胸もっ……そのっ……お、おマ○コもおっ……ふ、あっ！　はぁぁんっ！」

そこで殊更に臀部を少年へ押しつけてくる。性器と性器の密着度は高まり、リードしようとした進の方が唸らされてしまう。

「くっ……それっ、きついっ！」

「ふああん！ 進さんをいっぱい感じられて……私もっ……気持ちいいですうっ！」
進が喘いでいる間に、茉莉香は動きへ弾みを付けた。グッグッと進行方向を変えるごとに、力をこめ直す。そうなれば、膣圧が強まるのはもちろん、肉壁の群れがペニスへ突っ込んでくる勢いも上がる。

媚肉と衝突するたび、進の股間の中では、耐えがたいほどの疼きが荒れ狂った。熱といい痺れといい、いずれ体内に収まりきれなくなつて、火を吹きそうだ。

しかし、少年は呼吸を荒げつつ、負けじと乳房へ指をめり込ませた。ペニスを暴れさせた。

巨乳を下から揉み上げれば、質感と瑞々しさの両方が掌にしっくり馴染む。その愛しい手触りを貪るように愉しみつつ、腰を動かすのは、わざと茉莉香と逆の方向へ。何度も肉棒を濡れた壁へぶつけ、牝粘膜の甘美なうねりを味わった。

積極的な恋人達の律動に、我慢汁と愛液は泡立てられ、ジュブッ！ ニヂュッ！
一擦りごとに水音を猥雑にしていく。

だが、それと茉莉香の喘ぎに混じり、進には別の嬌声も聞こえてきた。

「ふああんっ！ 進くうんっ……あんっ！ 茉莉香 あっ！」

「珠実さん……っ!?」

進は思わず声の主の名を呼び、乳房を玩弄する指に力を入れる。

「ひうううっ！」

搾乳さんからの締めつけに、茉莉香は四肢を竦ませたが、それでも教えてくれた。

「ね、姉さんもっ……してるんっ……ですうっ……！ はうっ……あっ……進さんと私を見ながらっ……自分でっ……胸とっ……あ、あのっ……おマ○コを……おっ！」

（珠実さんがオナニー!?!）

年上の恋人が始めたというあられもない行為は、少年にとってさらなる起爆剤となった。思わず腰を浮かせ、茉莉香を深く穿ってしまう。

「きゃひっ……いいひっ!?!」

凶暴さを増した刺激に悶える令嬢へ、彼は怒鳴るように問いかけた。

「珠実さんがやってることっ……もつと俺に教えてくれ……よっ!」

「こ、こらあっ……進君っ、変な注文出さないでよおっ……!」

珠実が声に演技とは思えない狼狽を滲ませる。自分だって茉莉香の破瓜の様子を克明に言い表したくせに、妹から自慰の様子を実況されると、いささかうろたえてしまうらしい。

だが、進としては、何としても聞きたいのだ。

「茉莉香さんっ、頼むっ！」

彼はしこつた少女の乳首を、きつく摘み上げた。直後、指に広がる、硬さと混じり合つた弾力。そんな実力行使じみた要求に、茉莉香も堪らず声を裏返らせた。

「ひはぁあんっ！ は、はいいっ……言いますっ、言いますうっ！」

恋い慕う少年へ膣肉で疼きを捧げつつ、新しくせがまれたことにも応えようと、彼女は喘ぎにふしだらな表現を交え始める。

「ね、姉さんはっ、シャツから出した胸……っ……左手で揉んでいますっ……！ ひ……ううんっ！ 右手はっ……パンツを降ろしてっ……おマッ……コおっ！ 指でっ……かき回していますううっ！」

「気持ち良さそうっ!」

「は、いいっ……すぐく気持ち良さそうに指を出し入れしていて……えっ！ クリトリスにも触つててっ……！ あぁあっ……姉さん……！ 姉さぁんっ！」

それ以上はしたないことは茉莉香には言えないらしい。だが、進は珠実の姿を、鮮明に思い描けた。

ギチギチに締まっていた茉莉香の秘裂も、断続的な収縮を繰り返しだす。まるでペニスの神経を一本残らず揉みほぐそうとするかのようだ。

（珠美さんがっ……俺達のセックスを見ながらオナニーしてるんだ！ それでっ……茉莉香さんもますますいやらしくなって……！）

そう思うと、二人といっぺんにまぐわっているような気分に陥ってくる。珠実のよがり声も今やはっきり聞こえるようになり——と、その調子が僅かに変わった。どこか獲物を苛める猫のような感じで——、

「ま、茉莉香あっ……あたしだって、茉莉香のことっ……進君に教えちゃうんだからああっ……！」

（いっ……!!）

思いがけない、そして進にとつては悦ばしい意趣返しだった。

「やっ……ね、姉さっ……待っ……んああっ!!」

姉は妹が待つてとすら頼めないうちに、彼女のよがる姿を浅ましい言葉に変える。

「ま、茉莉香ねっ……進君の上に座って……えっ……あたしの前で脚っ、全開にするのおっ……！ 昨日まで男の子怖がってたのにいいっ……顔を精液まみれにしたまんまっ……進君のおちんちんでっ……お腹の奥まで広げられちゃってるのおっ！」

「やめっ……てえっ！ いっ言わないでええっ！」

茉莉香がようやく懇願を口にする。

だが、もう遅い。珠実も聞く耳など持たない。

やはり、言葉責めも姉の方が巧みだった。茉莉香はあっさり、昨日と同じく罵られるだけの立場へ転落してしまう。

「おマ○コのおツユなんてええっ……垂れ流しっ……でえっ……ソファアーもっ……進君の玉袋もおおっ……ぐしよ濡れにしちゃってるううっ！ あんツ……あああっ！進君の手で潰されてるおっぱいもおっ……精液と汗でグチャグチャなおおっ！」
妹を苛めながら、どんどんペースを取り戻し、声も高くしていく珠実。彼女は今、より一層の速度で秘所へ指を出入りさせているに違いない。

茉莉香もやめてと言いながら、腰振りを止められないでいる。むしろ、これ以上は不可能であろう勢いと力で、美尻も膣肉も少年へ擦りつけてくる。揺れる髪でも少年の鼻をくすぐっている。

——女の子はね、その気になれば身体のだこを使っても、好きな男の子を気持ちよくしてあげられるの——

さつき珠実が茉莉香へ言ったことは正しかった。

進は胸を掴む手も、ペニスも、それ以外も、茉莉香と触れ合う場所全てが燃えるように熱い。

すでに絶頂まで秒読み段階。竿はヴァギナの中でさらに猛々しく、硬くなり、粘膜も全方位が過敏になっている。

加えて、珠実の声までも。ここまで来たら、彼女の唇からこぼれる描写を聞いているだけでさえ、イカされかねない。

もはやフィニッシュめがけてひた走るしか、道はなかった。

(よ……しっ！)

彼は意図してソファアに背中を預ける。手を茉莉香の腰へ移せば、そこも汗と体温で、蕩けたようになっていた。ツルツと滑りそうなのを力いっぱい押さえつけ、茉莉香を持ち上げる。逆に自分はクッションへ尻を沈ませる。

「やつ……す、進さあ……んうはああっ!! 何を……やああっ!!」

茉莉香の悲鳴を聞きながら、再び彼女を自分の上へ引きずり落とす。ペニスは反対に突き上げた。

ジュググウッ!　ズヂュウウウッ!

秘洞は拡張されたばかりだというのに、ペニスが抜けかけるや、またも小さくなりかけていた。そこへ突撃を敢行したから、亀頭は業火で炙られたような痺れに満たされる。

茉莉香としても、亀頭の何倍もの面積の粘膜を、一瞬で切り開かれたわけで。

「ひはあああつ!? やつ……つあああうつ!」

絶叫は二オクターブ近くも高くなる。

「いやああつ……進さん……姉さんも許してええつ! これでは……あひんつ! わ、私だけえつ……イッて……っ……しまつ……あああつ!」

その訴えを聞きながら、進はまたも彼女を上へ追いやった。

「俺もっ、イキそうなんだってば!」

呻き、続けてまたも膣を貫通。子宮口までほじくり返す。

「んあああつ! す、進さああんつ!」

「うっ……ぐっ! んううむっ!」

これ以上、喉や腹を震わせていたら、自分が先に達してしまう。進は会話を打ち切り、後は無言で、何度も彼女とペニスを正反対の向きへ往復させた。

朦朧とした意識で思い出すのは、童貞を失った日に、珠実の腰を揺さぶったこと。

胸責めといい、直前までの腰遣いといい、珠実相手に覚えたことの集大成を、後輩

で生徒の少女へ叩きつけているようだった。

ジュブッ! ズブブッ! ズブブッ! ズブブッ!

「進さんもっ……イッ……てええ……っ！ イッてくださいいっ……！ 私だけじゃっ……駄目えええっ！」

いつしか、茉莉香も下半身を右へ左へくねらせだしていた。そんなことをしたら、どんどんエクスタシーへ向かってしまうだろうに、愛する少年も昇天間近と聞かされ、最後の力を振り絞ったらしい。彼女の願い通り、媚嚙は進の亀頭もカリ首も過激に抜く。その快感全てが、射精のための力となって、子種に溜め込まれていく。

「ひぁあっ！ んぐっ……っぁぁあっ!? す、進さぁんっ……私もうっ……イッてしまってますうっ！ どうかっ……どうか私と来てっ……イッてえええ……っ！」

「あぁっ……一緒にイクっ！ 茉莉香さんと一緒にいっ！」

訴えてくる茉莉香を一心不乱に打ち上げていると、珠実からも感極まった嬌声が寄せられる。

「あ、あたしもイキそうなのおっ！ 二人を見てると……おマ○コ止まらないんだからあっ！ 進君も茉莉香もおっ……あたしのイクとこ見てええっ！」

「珠実さんっ！」「ね、姉さぁあっ……ふぁあうっ！」

変態じみた告白とおねだりに、進も茉莉香も発情させられた。

三人が三人、互いのアクメを見る。見せ合う。

そう思った瞬間、進の白濁はついに動き出した。すでに中を我慢汁で埋められていた尿道など、無抵抗に広げられて破裂寸前だ。

「イクッ！俺っ……イクウウウッ！」

少年は二人の恋人へ白状しながら、茉莉香の肢体を左へ傾けた。ペニスはちょうど彼女を奥まで掘り抜いたところ。もともと快楽が漲ったところで圧迫が倍増し、しかも、視界に珠実の痴態が飛び込んでくる。

彼女は茉莉香の言うとおり、シャツを胸の高さまでたくし上げていた。下にブラジャーはなく、左手の五指はもぎ取るように生の乳房へ食い込んでいる。

股間の方は、もうどんな淫らな言い回しでも追いつかないほど、濡れそぼっていた。陰唇はぱっくり割れ、その内部を右手の人差し指と中指がグチョグチョと攪拌中だ。

中性的だった美貌も後ろへ傾き、汗でびっしょり。細められた眼差しは果てしなく退廃的だし、唇はしどけなく開いて、奥から牝犬さながらに舌を覗かせている。

もともと、進がイキかけの恋人を視認できた時間は一秒もない。彼のギラつく目を感じたことが、彼女にとつての決定打となったのだ。

「あひいっ……い……うはあああっ!? す、進くうんううっ！」

彼女は眉を寄せ、肢体を硬直させて、見世物さながらに股間を少年へ突き出した。

両手は止まり、それぞれの指を性感帯へ押しつける。

正面では、茉莉香もほとんど同時に、渦巻くオルガスムスの虜^{とりこ}となっていた。ヴァギナを奥までグリグリほじられながら、あられもなくエビ反る姿は、まるで姉と合わせ鏡のよう。

脚をいっぱい開いているのも一緒だ。全身が汗まみれなのも一緒だ。

「はうっ、んうううっ！ イクッ……うあっ、んっ……くふうううっ！ あっ……あはああああああっ！」

「進さんっ！ 姉さあん！ 好きですうっ！ 好きいいっ！ い……あああ……んふあああああ——っ！」

達した茉莉香の膣壁は、四肢と共に収縮する。その熱さといい力といい、欲望で爆^はぜそうな少年のものを、全力で抱擁するようだった。

進も急所を圧搾され、性器どころか頭の神経内でまで、快感電流が暴れ回る。

「いっ……イクううおおっ！」

美しい令嬢姉妹と同調するように、進は喉を痙攣させた。子種は外からも中からも力を加えられ、暴力的な勢いで尿道を擦った末、美少女の子宮へ噴きあがる。

ゴビュブブッ！ ビュブッ！ ドクドプドクドプウウッ！



珠実は背筋を折れんばかりに反らせたまま、震えていた。とても牡のピストンに耐えられそうな姿ではない。

進はローションが流れ落ちそうなほどに汗をかきながら、片手を持ち上げ、隣に目をやった。

「姉さん……姉さ……あん……っ」

強気な珠実が悶絶する姿に茫然自失の茉莉香。だが、少年の二本の指がアヌスへ触れても、「ひっ!」と身震いこそすれ、拒絶しようとはしない。

「いいんだよなっ?」

「は、はい……!」

念押しにもはつきり答えて。そこで進は、彼女へ指を再び入れていく。

「んくううつ……あ……うつ……ふあああっ!!」

茉莉香はもがくように身をくねらせたものの、侵入したものが細い分、姉よりは楽そうだった。そればかりか――、

「はひっ……進さんの指……また入ってきてえ……あ……ぶつかっていますうつ!」
ぶつ切りの声には、ほのかに悦びの意が示される。

「気持ちいいのか……っ、茉莉香さんっ!」

進がストレートに尋ねると、令嬢は反射的に口をつぐみ、しかし程なくモジモジと首肯。

性行為の知識をほとんど持っていないだけに、彼女の中では、どこまでが正常でどこまでが異常という線引きが希薄らしい。羞恥の枷から放たれさえすれば、好きな相手の求めることを何でも許してしまう。それこそアナルセックス以上に変態めいたことまでも――。

ブルル……ッ。

進は身震いしつつ、再び茉莉香のアヌスを広げ始める。さっきよりやり方は乱暴で、しかも人差し指と中指がセットだ。バラバラに屈伸させたり、菊門の裏をさすったり、あるいはバタ足さながら交互に躍らせたりも。にもかかわらず、令嬢は心地よさげに腰をくねらせだす。

「あ……んううっ……進さんにされるとっ……お尻でも嬉しいんです……っ……！あ……の……も……と……色……々……な……方……法……お……お……教……え……て……く……だ……さ……い……っ……！」

尻肉も波間を漂うようにユラユラ揺れた。

やはり、積極的になっている。

進もとことんまで付き合うつもりで、彼女へ入れた指をピンと伸ばし、Vサインの

形に開いてみた。少女の肛門は無理やり横長の形にされ、

「きつ……はあああつ!？」

被虐的なよがり声が、浴室の壁に反響。さすがにしなやかだった筋肉は異常をきたし、前のめりの姿勢で跳ねた。菊座も急に力を強め、万力まんりきさながらに指を搾ってくる。責めている進の方まで、「ぐっ……!」第二関節に痛みを覚えてしまった。

とはいえ、彼は興奮もさせられて、再び肛門周りを腸内へ押し込み、次いで捲り上げにかかる。

茉莉香も恐慌に陥りかけたのは、ほとんど一瞬に過ぎない。

「いいですつ……いいんですつ! 私つ……進さんにここまでしてもらえるなんてつ……し、幸せ……ですう!」

彼女はより過激になった往復に快感を見出した。その随喜の声を聞いていると、進は腸内の襞が舌のようにのたくって、ペロペロ自分をしゃぶってきているように思えるのだ。括約筋のきつさも、今や二人が快感を堪能するためのものに成り果てていた。もつとも進の方は、アナル責めの最中に、肉棒も横へ捻られる。

「つあああ!？」

珠実へ突っ込みながらも動けずにいた男性器の中では、もどかしさと疼きが同時に

成長中だった。そのもどかしさの方が瞬時に揉み潰され、疼きが格段に膨張する。

「つつ……おとおっ!」

目を正面へ戻せば、珠実も自分で腰をのたうたせたことに驚いているらしかった。

「あたし……やあん……変なお……痛いのに……痛いはずなのに……っ」

気持ちよさそうな茉莉香を見るうち、肉欲が尻穴の内に溜まってきたのかもしれない。

進は陰茎をへし折りかねない排泄孔に抗って、男根を傾けてみた。

——ゲイッ!

刹那、へし折られるどころか、輪切りにされてもおかしくない圧力が、竿の根元にかかる。

思わず顔をしかめてしまったが、珠実も汗だくの背を弓なりにしている。

「きひっ!? いいあああっ!」

進はそこに妹と同じ愉悅の存在を垣間見た。

（これって……チャンスじゃねえか……!）

調子に乗った彼は、腰を引いてみる。珠実を傷つけないため、動きには細心の注意を払ったが、恋人からこぼれたのは、むしろもどかしげな喘ぎだ。

「いっ……いああ……やあっ……はああん……っ！」

もう、疑いの余地はなかった。彼女も無邪気な妹に煽られ、アブノーマルな肛悦に目覚めてしまったのだ。

もっとお、と続いてもおかしくない嬌声。いや、進は本当にそう続けてほしくなかった。

「欲しいっすか……っ?! 珠実さんっ……もっど欲しいんですかっ?!」

勢い込んだ質問に、女体を収縮させる珠実。だが、彼女はその強張りを解けないままに、身を上下に揺すり始める。

「う……んっ! うん! うんっ、うんっ!」

いかにも無我夢中といった感じで、何度も何度も領いた末、ようやく人の言葉を思い出したように叫んだ。

「欲しいのおっ……もっど欲しいのおおっ!」

「分、かりましたっ!」

カリ首まで抜いたペニスを、進は再び突き出す。

ズブッ! ズグブッ!

二度目の突進ともなると、肉棒がアヌスへ挿入される様子も、じっくり観察できた。

肛門周りの肉は、ぴったり触れ合う剛直に巻き込まれ、穴の中まで道連れにされていく。小さかったすばまりが、痛々しく変形し、クレーターじみた窪みになるのだ。そこから少年が再び抜けていくと、菊門は外まで引きずり出されてしまう。剛直にサイズを合わせた薄皮は、皺を一本も残しておらず、ゴム膜さながらの伸びようだ。(もし、もうちよつと引つ張ったら……)

プチリと千切れてしまうかもしれない。

しかし、吹っ切れた珠実は、そこにすら快感を覚え始める。

「つうああ……あつ……はひいっ！ いいのおっ！ あたしいいっ……お尻でも進君を感じられるように……なつちやつたああつ！」

まるで自分を貶めるかのように、彼女は恥を打ち捨てた悶えつぷりをさらけ出し。

進は下がる間中、痛みと悦楽とで、官能神経を振り回されることになったが、

(いや……！)

もはや、どちらが責めているとか、苛めているとか、そんなことは関係ない。互いに快楽を与え合い、受け取り、官能の極みを目指していければ、それでよかった。

そこへ茉莉香も懇願を絡ませる。

「進さん……私にも……お……つ、続けて……くださ……いっ……！」

「あつ、悪……い……！」

珠実に集中する過程で、進は茉莉香への愛撫を止めてしまっていたのだ。慌てて指を蠢かせ、止まっていた分を取り返すように、一段と凶暴な抽送を展開する。珠実へも三度目の突入を敢行。

「き、いいっ……来てくれ……てっ……くうあああつ！」

「んくふうう……くっ、ひうううっ……っああああつ！」

姉妹の嬌声は見事なほどに重なった。

もつとも、それは少年の意図したところではない。

「ふっ！　ぐうううっ！」

裏筋や竿の皮が張った分、睾丸で生成された白濁へ送られる力もものすごく、気を抜けば、あつという間にイッてしまいそうなのだ。責めの強弱を調整する余裕など、あるはずもなかった。

「くううおっ！」

事実、彼が二つの律動をいっぺんに始めると、タイミングがぶれる瞬間も一致する瞬間も出てくる。

「んああああつ！　きやうっ、ううううんっ！　あひいっ！　進くうううんっ！」

「ひ……ううっ……ふあっ……ああ……う……っ！ くっ……あぐ……う……っ！」
珠実が声を張り上げる横で、茉莉香が歯を食いしばり、茉莉香が悶えている時に、
珠実が四肢を硬直させる。

だが、重なっていても、ズレていても、姉妹の姿には男心をかき乱す魅力があった。
「はっ、はあっ、はあっ……珠実さん……茉莉香さん……っ！」

高まる愉悦で、進は立ちくらみを起こしそうになる。だが、貪欲なピストンは止められない。

最初はどう対応すればいいかわからなかった肛門のきつさが、今やすっかり気に入ってしまった。中毒にさえなってしまうそうだ。

しかも、一番戸惑っていたはずの珠実は、自分から進んで、股間へ片手を伸ばしだす。指はすかさず陰唇へねじ込まれ、畏へかかった猛獣さながらに暴れだした。

グチャッ！ ニチャブチャッ！ ジュブジュブッ！

あまりに大きな蜜の響き。作り物のローションなど、とつくに流されていたらしい。「ひはああっ！ いいの……前も後ろもおおっ……あたしっ、どっちもグチャグチャアアッ！」

無心に二穴で愉悦を食う、浅ましい姿。

それを見て、茉莉香までが濡れそぼつ股間へと指を潜り込ませた。清楚だった令嬢は、たった数日の合宿で、オナニーへの抵抗を失ってしまっている。

「私も……ですううっ……いいイッてえ……し、しま……あっ……くはああんっ！」

二人の過激な自慰は、薄い肉の壁を通して、コツリコツリと進の方も刺激した。

茉莉香の指遣いは、膣壁と共に進の指まで愛でてくるかのようなのだ。進がつられて、それを撫で返せば、美少女の腸壁はますます情熱的に捏ねくられ、

「あああんっ！ 進さんっ！ 好きですっ……進さああ……あああんっ！」

歓喜の声もさらに高くなる。

珠実が進へもたらす刺激は、妹よりも強かった。何せ、こちらがノックするのは、精液に脅かされている最中の陰茎である。振動は裏筋を揺さぶり、少年の心まで突き崩す。

「おっ……いぐうううっ！」

許容量を超えた悦楽に、進はついつい奇天烈^{きてれつ}な呻きを洩らしてしまった。

尻を引き締め、自分だけイクのは辛うじて防ぐが、尿道の中で粘液がゴプツと泡立つのは、はつきり分かった。

（駄目だっ、もたねええっ！）



リアルドリーム文庫28

令嬢姉妹と誘惑個人授業

【電子書籍版】

著 者

伊吹泰郎

装 丁

キルタイムコミュニケーション制作部

発 行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F

●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146

●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Yasuro Ibuki 2009-2011

当ファイルは、リアルドリーム文庫「令嬢姉妹と誘惑個人授業」
(2009年11月30日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>